

平成 24 年度 (2012 年度)

福島大学 FD プロジェクト活動報告書

～ 大学教育改善の追求 ～



2013 年 3 月

福島大学 FD プロジェクト



1.はじめに

福島大学F Dプロジェクト責任者
教育担当副学長 飯島 充男

福島大学は、平成 26 年度に大学評価・学位授与機構による再度の認証評価を予定しており、それに向けて平成 24 年度自己点検・自己評価書、平成 25 年度自己評価書の作成をすすめている。この認証評価を本学の教育の実質的な改善につなげていくことが重要だが、折しも教育界のみならず経済関係諸団体や政治の側からも、大学教育のあり方についてたくさんの意見が寄せられている。

たまたま私は平成 24 年 11 月に大学教育学会課題別集会に参加したが、日本学術振興会理事長、文科省中教審副会長・大学分科会長の安西祐一郎氏が提起した、以下の点は印象的であった。

- (1) 教員自身が、学生の人生を決めるのは「自分の教え方」だと考える覚悟を持つ
- (2) 教員自身が、学生が答えのない問題に答えを見出す方法を主体的に学ぶことを奨励する教育へ、「教育方法を転換」する
- (3) 教員自身が、自分の研究も「学生の教育」も、ともに社会人としての責務であることを自覚する

つまり大学教員も「研究のプロ」であると共に「教育のプロ」でなければならないということである。教員評価を強調する点、市民的倫理育成には触れていない点などは気にかかるが、大学教員も教育のプロとして「教育スキル」を十分に身に付けなければならないというのは、ユニバーサル段階の大学教育の一端を担っているものとしては、受け入れざるを得ないところである。本報告書は、こうした安西氏の協調する大学教育のスキル向上、教授方法の改善に資するべく刊行されてきた。報告書には、様々なフォーラムやシンポジウム、F D合宿での学生の発言等が収録されているが、こうした発言内容等から福島大学の教育改善・教授方法改善につながるヒントを発掘して下さるよう願う。

なお教授方法改善を主たる目的とする福島大学の「F Dプロジェクト」は、来年度より教育企画委員会と統合し、その委員会の機能として教授方法改善を追求することになる。したがって福島大学F Dプロジェクトという組織の責任で刊行される『福島大学F Dプロジェクト活動報告書』は、本報告書をもって終了となるが、来年度も内容そのものは引き継いで行きたいと考えている。

最後に、F Dプロジェクト活動を進めるにあたって、また本報告書の刊行にあたって、F Dプロジェクト委員、教務課職員の方々に多大なるご努力をいただいた。とりわけ絶大なご尽力をいただいた総合教育研究センター高等教育開発部門渡部芳栄氏に心より感謝申し上げます。

大学教育学会課題研究集会（2012年11月22日～23日）	21
弘前大学FDワークショップ（2012年12月7日～8日）	22
4.FD・SD ジョイントセミナー	23
5.FD 宿泊研修	27
6.各学類のFD活動	43
7. LiveCampus を利用した中間アンケートの試行	47
8. 「教育改善のための学生アンケート」集計結果	
「教育改善のための学生アンケート」（前期）集計結果	51
「教育改善のための学生アンケート」（後期）集計結果	75
9.福島大学FDプロジェクト要項	98
10.福島大学FDプロジェクトメンバー	100
11.あしがき	101



2.授業公開&検討会

FDワークショップ 授業公開&検討会



今年度の実施日程

- ・日 程：平成 24 年 12 月 3 日（月）1 時限
- ・授 業 者：渡部芳栄 先生（総合教育研究センター）
- ・実施概要：授業公開「福島大学論」（L1 教室）
検討会 なし

- ・日 程：平成 24 年 12 月 19 日（水）3 時限
- ・授 業 者：金井光生、塩谷弘康、鈴木めぐみ、山崎暁彦、清水昌紀 各先生
（行政政策学類）
- ・実施概要：授業公開「法律討論会」（L1 教室）
検討会 なし

- ・日 程：平成 25 年 1 月 10 日（木）1 時限
- ・授 業 者：三宅正浩先生（人間発達文化学類）
- ・実施概要：授業公開「社会と人間」（M23 教室）
検討会 授業終了後（人間発達文化学類 207 演習室）

- ・日 程：平成 25 年 1 月 17 日（木）4 時限
- ・授 業 者：Gunske von K ä ln, Martina 先生（経済経営学類）
- ・実施概要：授業公開「ドイツ語初級 E」（S11 教室）
検討会 授業終了後（S11 教室）



第1回 授業公開

日時 平成24年12月3日(月)1時限
8:40~10:10 授業公開(L1教室)
検討会なし
授業科目 「福島大学論」
授業者 渡部芳栄 先生(総合教育研究センター)



授業者からの報告

渡部 芳栄

「福島大学論」を公開して

本学に着任して2年目で、本格的に授業を受け持つことになった。教育社会学(主に、大学と社会の関係)や高等教育論を専門としてきた私は、総合科目として「福島大学論」という科目を開講することとなった。

この授業では、いわゆる「自校教育」と「学問の世界」を内容とし、自大学の歴史・教育の狙い・カリキュラム・施設・組織、及び展開されている学問について学生が知ることによって、今後の学びの見通しを立ててもらおうという狙いがあった。公開したのは第8回目の授業であり、中間ふり返りも含めて上記の点を再確認した回でもあった。

なお、授業を公開した理由の1つとして、(あまりあからさまに書かないほうがいいのかもしれないが)年度計画に「FD活動の一環として、ICT利用者の実践報告会」を実施することとしていたことから、私が実践しているICT教育について参観頂き、御指導を頂ければとの思いもあった。当日は、4名の教職員の方に参観頂いた。授業で展開したICT教育の具体的な内容は、職員専用掲示板にpdf版で掲載予定の「こま・ちえ」に掲載しているので、そちらを参照いただきたい。当日は、その一部(「クリッカー」「iMindmap」「LiveCumpus」「iPad」、加えてICT機器ではない「シャトルペーパー」「グループワーク」)を使って授業を行ったが、参観された教職員の方々にはどのように映られたか、ご意見・ご感想を頂ければ幸いである。また、「こま・ちえ」をご覧になった方からのご意見・ご感想も頂戴できればと思っている。

この授業の内容はシラバスでは以下の通りに予定していたが、クリッカーのバージョンアップ、私自身のインフルエンザ罹患があり、若干の変更があった。上述のように、公開した授業は第8回目であった。

第1回: ガイダンス / 第2回: 学長講演 / 第3回: 教育担当副学長講演 / 第4回: 福島

大学のキャンパス、構成員・組織 どこに何があり、何ができるか / 第 5 回：大学をめぐる状況の変化 高等教育政策の変遷 / 第 6 回：大学教育の改善とその理念・実態 主に大学改革状況調査から / 第 7 回：福島大学の情報 学習案内・便覧・シラバス、福大の顔・広報、HP など / **第 8 回：学問の世界** / 第 9 回：福大の学問地図を書いてみよう(グループワーク) / 第 10 回：報告会 / 第 11 回：自己学習プログラムの理念と実績 / 第 12 回：自己学習プログラム申請書を書いてみよう(グループワーク) / 第 13 回：報告会 / 第 14 回：福大生の成長 GPA・就職状況・企業アンケート / 第 15 回：まとめとふり返り

第 8 回の内容は、この授業で最も難しい内容だった。自分としても、本当にきちんと教えられるか自信があったわけではない。また、折しも睡眠障害・過労による約 2 週間のダウンの直後だったこともあり、様々な不安があった。

なぜ「福島大学論」の中に、学問の世界を入れたのか。それは、第 1 にこの授業が総合科目であり、文理融合の内容を教える必要があったためである。文理融合には、一部の教員・学生双方から批判の声が上がっているのも事実であるが、私は非常に重要なことだと考えている。卒業をする時に、「私は学生時代に、教育学/経済学/法学/工学を学んできました」と言うだけでなく、幅広い視野から自分の学んだ専門内容を客観視できるように成長してほしいと思っているからである。また、専門や考え方の異なる他人とのコミュニケーションを円滑に進める際にも、有効に機能するのではないかと考えている。そのため個人的には、人文社会学群の学生こそ自然科学も一生懸命学んでほしいし、理工学群の学生こそ人文科学・社会科学も一生懸命学んでほしいと考えている。そうした観点から、授業のグループワークも学類を超えて編成もし、さらに言えば、第 11~13 回(実際にはずれ込んでしまった。)に予定していた自己学習プログラムに関するグループワークにも、幅広い視点を生かしてほしいという願いもあった。

その学問の世界を表現するためには、図が有効であると感じていた。ただでさえ難しい内容であるのに、文章で、しかも L 教室で教えたら、9 割の学生を寝かせる自信があった。そこで「iMindmap」を使って、動きのある学問の世界の発展過程や現状を表現する方法を



採ったが、自分の能力不足や体調管理の悪さもあり、決して十分であったとは言えない。しかし学生からは、「見た目で分かりやすかった」「絵もあるマップで、とてもよく理解できた」等の感想があり、寝ている学生も 1 割ほどだったと思うので、ある程度狙いは成功したと言えよう(1 割の学生を寝かせない努力は、今後も必要だが...)



第2回 授業公開

日時 平成24年12月19日(水)3時限
13:00~14:30 授業公開(L1教室)
検討会なし

授業科目 「法律討論会」

授業者 金井光生、塩谷弘康、鈴木めぐみ、
山崎暁彦、清水昌紀 各先生(行政政策学類)



参観者からの報告

丸山 和昭

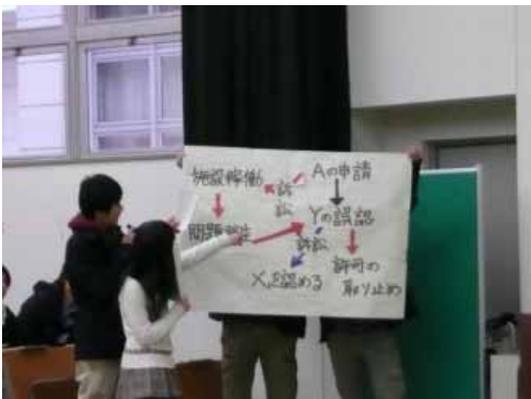
「法律討論会」に参観して

行政政策学類の法学専攻入門科目に位置づけられる「法律討論会」(金井光生、塩谷弘康、鈴木めぐみ、山崎暁彦、清水昌紀の各先生が担当)を参観させていただきました。学生が立論を競い合う姿に、大いに感銘を受けました。

シラバスを拝見させていただくと、「法律討論会」は、法学専攻の2年次前期(法学専攻入門科目)と、2年次後期(法学専攻入門科目)と密接に結びついていることがわかります。各先生方によって、授業計画の細部に違いがありますが、概ね、前期には専門知識の基礎の習得とゼミ内での議論を通じた学習が、後期にはクラス合同で行われる法律討論会に向けた準備と具体的な立論が、授業内容として共通していると解釈いたします。また、法律討論会の他にも、文献の調べ方、キャリア教育、裁判傍聴ガイダンスなど、専攻全体の共通の授業との関連付けが図られるなど、専門教育における、学生参加型の授業実践について、お手本のような取組を見せていただいたように思います。

法律討論会の実際の内容は、すべてのゼミに統一の問題(今回の場合は環境開発をめぐる法律問題)が与えられた上で、各ゼミにおいて、それぞれ問題に対する立論を構成し、

代表者がその立論に基づいた答弁を行い、他のゼミからの質問・反論に答え、その様子から審査員が各クラスの立論を評価する、といった構成となっておりました。タイムキーピングや、具体的な評価に当たっての注意点など、進行方法にも深い配慮が窺え、大変勉強になった次第です。10年以上、継続的に行っている活動ということで、教員間での引継ぎと改善が、うまく機能している証左ではないかと感じました。



昨年来、大学での教育方法の改善をめぐる議論では、中央教育審議会の答申に明記されたこともあり、能動的学修（アクティブラーニング、教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法）が、にわかに注目を集めております。しかし、法律討論会に代表されるように、従来から行われてきたゼミ活動やフィールド重視の授業活動など、学生の参加を取り込んだ授業内容・方法上の工夫は、改めて能動的学修と銘打つまでもなく、福島大学の教育実践の中に根付いているように思われます。

他方、実際に授業を担当されている先生とのお話から、学生間における参加意欲や学修状況の格差など、学生参加型の授業活動における課題も窺うことができました。これもまた、長期的に行ってきた実践の中から見えてくる課題かと思われまます。今後、福島大学における教育方法の改善を進める上では、このような各分野での取組及び課題を掘り起し、共有していくことが、まずもって重要なのではないかと、改めて考えさせられた授業公開でありました。担当された先生方、御協力いただき、まことにありがとうございました。



第3回 授業公開

日時 平成25年1月10日(木)1時限
8:40～10:10 授業公開(M23教室)
10:20～11:00 検討会(人間発達
文化学類 207演習室)

授業科目 「社会と人間」
授業者 三宅正浩先生(人間発達文化学類)



授業者からの報告

三宅 正浩

1. 授業実施の前提

授業公開した「社会と人間」は、人間発達文化学類文化探究専攻の専攻共通科目であり、当該専攻の学生にとっては必修科目である。2年生以上対象なので、履修者のほとんどは文化探究専攻の2年生で、3・4年生や他専攻の学生も若干名受講しており、履修者数は125名と多い(授業公開当日の出席者数は101名)。授業形式は、7名の教員によるオムニバス形式である。以下に、シラバスから授業概要を引用する。

人間にとって社会とは何か? 専攻共通科目である「社会と人間」は、社会に生きる私たちにとっていわば根源的ともいえるこのテーマに、専攻所属の7名のスタッフが、歴史学、経済学、社会学、住居学、言語学、社会言語学など、さまざまな視点からアプローチする試みである。授業をとおして、社会と人間との深い関わりへと分け入る基礎的な知識と感性を体得していただきたい。

公開した授業は「社会と人間」の12回目であり、三宅が担当する2回分の内の1回目にあたる。三宅担当分は「日本近世社会論 静かな転換:17世紀末～18世紀初頭」というテーマを掲げ、日本史学(の近世史分野)の立場から社会と人間に関する問題にアプローチするものである。

先述した授業の性格をふまえ、授業を行うにあたっては、日本史学の授業内容にあまり関心を持たない学生、専門的知識をほとんど持たない学生が、それぞれ一定程度存在していることに注意しておく必要がある。すなわち、必修であるため、興味関心の有無に関係なく、言語文化・地域生活文化・数理科学の各学習クラス所属の学生が受講しており、他専攻の学生も若干名受講している。しかし、だからといって日本史学の専門的内容にまったく踏み込まない方法は、大学における専門教育としては適切でなく、ある程度の専門性を担保する必要があるとも考えている。

2. 授業内容

〔授業の流れ〕

社会に関する歴史学的アプローチの説明

歴史学の学問的意義と課題を説明し、本授業では「社会の転換」に注目することとその意義を説明

取り上げる事例の紹介

近世の元禄時代（五代綱吉政権期）の諸政策、特に生類憐みの令を取り上げて社会の転換について考えることを説明

史料の読み解き

『京都町触集成』（岩波書店）の元禄7年（1694）部分をコピーして配布し、生類憐みの令を探し出す作業を課す

解説

生類憐みの令に該当する町触を受講生に問いかけながら確定し、生類憐みの令が22年間にわたって出し続けられた法令の総称であることを説明

展望

生類憐み政策の内容と趣旨を理解したことを前提に、それが行われた背景を政治的・社会的に考える必要があることを示し、次回の授業に繋げる

〔授業の特徴〕

史料（歴史資料）を読み解くことを受講生に体験させることが本授業の特徴であり、最も重視した点でもある。日本史学の分野では史料の読み解きが最重要であるが、大部分の受講生は史料に接した経験はなく、「取っつきにくい」「難しい」と感じる学生が多い。そうしたなかで、意味はとれなくとも単語に注目することによって読み解きがある程度可能であることを示そうと試みたのが本授業である。

3. 反省と課題

史料読解を体験させる試みについては、受講生の多くにとっては新鮮であり、好意的に評価されたようである。一方で、事後の検討会においても指摘されたが、授業の導入にあたる ・ に時間を割きすぎた点は反省したい。単に史料を読むだけではなく学問的思考の重要性を伝えたいがために ・ に力点を置いた面はあるが、オムニバス形式且つ多人数授業において「小難しい」学問的意義の追求をどこまで行うべきなのかは、授業全体のバランスにも留意しながらなお検討していくべき課題であろう。意欲・知識が様々である多人数授業において、受講生のニーズに配慮しながらも学問の専門的内容レベルの維持を図るため、さらなる試行錯誤が必要であると考えている。



最後に、授業公開・検討会に参加いただいた皆様に御礼申し上げます。

日時 平成25年1月17日(木)4時限
14:40~16:10 授業公開(S21教室) 16:20~16:50 検討会(S21教室)

授業科目 「ドイツ語初級 E」
グンスケ フォン ケルン ・ マルティーナ

授業者 Gunske von K ö l n, Martina (経済経営学類)

授業公開のテーマ：
学生が授業へ積極的に参加できるように、どのような教授テクニックがあるだろうか。授業者が様々なテクニックを紹介する。
ドイツ語ができない方も参加可能だ。

授業者からの報告

Gunske von K ö l n, Martina

1. ドイツ語初級Eの目標

この「母語話者の授業」では、一年間のあいだに基礎のドイツ語文法以外に、コミュニケーションスキルも重視して教授する。

この際、ドイツ語教員グループが全部のドイツ語初級クラスのために同じ文法のシラバスを考え実践しているので、中級クラスを受講生は初級クラスで大体同じ文法を勉強する。

そして、この基礎ドイツ語文法とコミュニケーションスキルの教育に合致するテキストを選定した。授業者はこのクラスの授業を年間週2回担当するので、前期は火曜日・木曜日、後期は木曜日に前記のテキストを使用した。加えて、後期の木曜日にはオラルコミュニケーション(話す・聞く能力)技能を高めるため、12月までにテキストで勉強した内容を要約し、1月の木曜日の授業においては現実に近いコミュニケーションの練習を行った。(加えて、後期の火曜日においては主に読む・書く技能を高めるため作文練習用のテキストを使用した。)

2. 成績評価の方法の概要

毎月筆記小テストを行った。(後期は10月、11月、12月の3回)

1月は小テストの代わりに正規試験・補講期間に平常試験を行った。この際、口答試験を実施した。しかし、口答試験は学生にとって戸惑うことが多いので、事前に口答試験に似ているシーンを設定し、模擬実験(1月の授業中)を行った。



写真:II-2 第2の練習:書き取り中

5つの能力「話す・聞く・読む・書く・記憶」を高める書き取りの方法:

書き取りの文書がホワイトボードに張ってある。

学生がペアで働いて、1人が書き取りの1つの文を読んで(読む能力)、席に戻って(記憶能力)、パトナーに文を教える(話す能力)、パトナーが文を書く(聞く・書く能力)。次は逆にして先に書いた人が今度次の文を読んで、パトナーに教える。

文を途中で忘れた場合はホワイトボードに何回でも戻ってかまわない。

3. 公開授業の内容：

I.	Warm up
	<p>コミュニケーションスキルのアップを重視するため、学生全員が毎回の授業で少なくとも必ず1回話することが出来るようにつとめているが、人数が(40人くらい)多いので、実現は難しい面がある。そのため出席を確認するとき、簡単な問題(通常40個)を用意し、誰でも1回答える機会を作っている。例えば、公開授業においてはアルファベットのスペルを復習し、下記の要領で誰もが1回答える機会を作った。</p> <p>1) まずはアルファベットを思い出せるようにアルファベットの歌(CD)を聴いて、みんなで歌った。</p> <p>2) 次に学生が一人ずつアルファベットを唱えた。</p> <p>3) 最後に授業者が言葉をアルファベットで言って、学生がどんな言葉か当て答えた。 例えば、S-E-N-D-A-Iは仙台だ。</p> <p>備考: スペル能力はドイツ語初級者にとって、とても大切な道具のため、この練習を重視し実施した。</p> <p>また、向学心のある学生のために「ボーナス点コーナー」を設けている。そのため、冬休みの前に練習問題を配り、この練習への参加の選択は学生に任せた。この練習問題の正答指導は1月以降の授業で少しずつ行った。</p> <p>4) 次の練習は冬休みの復習練習問題のチェックを行った。(正しい答えの場合はその学生に1点あげる。この得点は失敗したテストに使える。)</p> <p>5) 前回の授業の復習練習の正答指導も最後に行った。</p> <p>復習練習を重視するので、毎回様々な練習を実施している。</p>
II.	試験シミュレーションの練習、第2シーン 備考: 前回の授業では第0と第1シーンを練習した。
II-1	シーン2の準備 第1の練習: モデル文の紹介とその構成の理解
	<p>紙に書いてあるモデル会話文を5つの部分に切って、学生が正しい順番についてグループで考えた。(各グループに5つの部分の1セットを配った。)</p> <p>備考: この練習で書いた文の紙を手持つので、特に手触りタイプの学習者に効果的である。</p>
II-2	シーン2の準備 第2の練習: 書き取り
	<p>次は5つの「話す・聞く・読む・書く・記憶」能力を高める書き取りを行った。先のモデル会話の一齣を使った。この書き取りの説明は前記参考</p> <p>備考: この特別な書き取りはもう一つのメリットがある: 体全体を使う練習のため、特に寒い季節になると、居眠りの防止に効果的である。</p>
II-3	シーン2の準備 第3の練習: コミュニケーションスタイルの練習
	<p>初級学生が会話を作るときに、テキストによくある不自然なドイツ語を使い、会話ではない面接みたいな変な文を使う傾向にある。これらを防止するためコミュニケーションスタイルの練習も行う。この練習にもまた先のモデル会話の一齣を使った。</p> <p>備考: この練習は外国語教授法の専門語で mirroring (ミラーリング) と言う。 「ミラーリング」の例は後記参考</p>
III.	その他
	<p>II-3までの練習は70分くらいを要した。そのため、シーン2の練習は次週の木曜日にも継続して実施つもりだ。また当日授業の最後には</p> <p>1) 当日の宿題を説明し、</p> <p>2) 学生が一所懸命に勉強し、円滑に授業が進んだら、最後に5分から10分くらい</p>

<p>時間が残っている場合（通常、80分程度の授業の準備）この時間を利用し、ドイツ関連のアナウンスをしたり、ドイツの文化、面白いエピソード、^{珍事}珍談などについて日本語で紹介したりする。このことは学生に好評であるので、学生はそういう話が聞けるように、授業が順調に進められるように協力する。当日の「御負け」はドイツ人学生が作った「Surprise」という短編映画を見ることだった。</p> <p>公開授業終了後の学生アンケート「授業の感想」によると、ドイツ人のユーモアの一面を大勢の学生に見せて、感じさせることができたようだ。</p> <p>備考： Veit・Helmer という監督者がこの映画により26の賞を受賞した。（例えば Seattle International Film Festival）</p>

4. 今後のFDプロジェクト：外国語公開授業

FDプロジェクトに参加したのは今回初めてだった。同僚が公開授業・検討会に参加して下さって、とてもいい経験だった。

今後外国語授業も多く公開し、外国語教員がお互いに外国語教授について意見交換できれば、とても良いことだと思う。是非、この機会を増やしてほしいと思う。

また、できれば、その際、授業者が当日授業の内容を要約し、公開授業の数日前に事前配布できれば、授業者だけではなく見学者も授業の準備ができるし、効果的な見学や検討会の実施にもつなげることができると思う。

また、外国語公開授業の場合は教授法の同じトピックについて数回の授業を公開することも考えられる。

（例えば、今回の公開授業のトピック：「学生が授業へ積極的に参加できるように、どのような教授テクニックがあるだろうか。授業者が様々なテクニックを紹介する。」）

最後に、学生、見学者とFD担当者の皆様に感謝いたします。



写真：II-2 第2の練習：書き取り中



写真：III「その他」ドイツの事情を説明するときドイツの地図を使用するので、黒板には地図が毎回張っている。ホワイトボードには春休みの時もドイツ語が学べる機会の紹介だ。

第3の練習：コミュニケーションスタイルの練習 ミラーリング

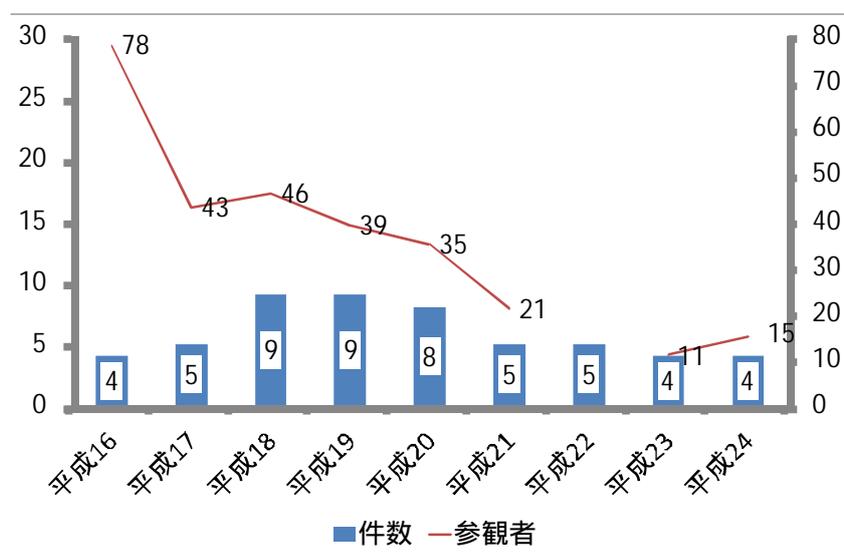
A: Woher kommst du?	B: Ich komme aus Japan.	A: Ach so, du kommst aus Japan. Cool!
T: Wie heißt du?	N: Ich heiße Nozomi.	T: Aha, Nozomi.

授業公開 & 検討会の現状と今後について

総合教育研究センター高等教育開発部門 渡部芳栄

今年度も昨年度に引き続き、4件の授業公開&検討会(一部は検討会なし)を行いました。公開して下さった先生方、ご協力ありがとうございました。

この授業公開&検討会は、FDプロジェクトにて平成16年度から開始されました。近年のFDプロジェクト報告書を見てみると、公開してくれる方を探すこと、参観者を増やすことが課題として挙げられ続けてきたように思います。



平成22年度の参観者のデータは残っていない。

そこで今年度のFDプロジェクトでは、平成16年度から現在までの実施件数と参観者の推移をまとめてみました(上図)。図を見ると、特に平成21年度以降は実施件数・参観者ともに少なくなっていることが分かります。近年では、「学類で1つは公開」といったノルマ的な意味合いも帯びてきていることも事実であります。それに加えて、今年度の参観者の顔ぶれはのべ15名のうち12名がFDプロジェクト委員でありました(もちろん、それ自身必ずしも無意味であるという意味ではありません)。これらの現状を踏まえ、現行の授業公開&検討会の実施の意義・方法等について、次年度以降本格的に再検討をする必要があるかもしれません。

例えば、自己デザイン・共通領域は分野(キャリア、総合科目、広域、情報、健康・運動、英語、非英)で毎年2~3分野ずつ持ち回りにし、分野FDの一環として行う、学類専門科目については、学類FDの一環として行う(これらは、授業方法よりも授業内容に重きを置いたFDの意味合いです)、新任教員等には、研修の一環として参観を義務付ける、特に講義形式のものについては、担当者本人の申し出がない限り常時公開とする、などの改善案が考えられますが、その他の在り方も踏まえた検討も次年度以降の課題かと思えます。

FDワークショップ 授業公開&検討会に向けて 授業者と参観者の皆さんへ

福島大学 FD プロジェクト

福島大学では、今年度のFDワークショップとして「授業公開&検討会」を開催することになりました。実際の授業をお互いに見せ合って、具体的に授業をどう改善していったらいいかみんなで話し合おうという試みです。福島大学全体の授業力量充実・向上のためにも、授業を公開された方が「皆さんに見ていただけてよかった」と思えるような、また参観者の方々も「今度は自分の授業を見てもらおう」と思えるような、そういう会になることが必要です。そのために以下の諸点に注意しながら、授業公開&検討会に参加してください。

- 1) 「授業公開&検討会」の目的は授業改善であって、だれかを批判したり、非難したりすることではありません。みんなが前向きになれるような明るいムードの会にしましょう。
- 2) 授業者は、ふだんどおりの授業を心がけてください。他の先生方が聴いているからといって、いつもより高度な内容に触れたりすることのないようにしてください。
- 3) 参観者は、その授業の「いいところ」を発見し、自分の授業にも生かすよう、心がけてください。
- 4) 参観者は、学生と一緒にあって授業の内容だけに集中しないでください。大事なことは、授業中の学生の反応であり、学生がどのように学んでいるかという事実です。授業の内容や授業者の行動の変化によって、学生は敏感に反応しているはずです。学生は、どのようなときに授業に集中し、どのようなときに集中力を失っているのでしょうか。
- 5) 参観者は、今日参観した授業が、15回分の1回であるということにも留意してください。
- 6) 教室の環境などにも留意して参観してください。
- 7) 検討会の中では、参観者が授業者を誉めることから始めましょう。授業者も過度に自己反省の弁を並べたてる必要はありません。大学教育に関しては誰も皆、素人みたいなものなので、お互いにアイデアを出しあって、それぞれが抱える問題を解決していきましょう。

(注意) 授業公開中の**教員同士の私語**は、学生の受講の妨げになりますので、くれぐれも慎んでください。



3.他大学 FD 研修等参加報告

第 34 回大学教育学会大会 (2012 年 5 月 26 日～27 日)

大学教育改革地域フォーラム 2012 in 宮城教育大学 (6 月 29 日)

Q-Links 第 3 回 OD プロジェクト (8 月 29 日～9 月 1 日)

東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会 (8 月 31 日～9 月 1 日)

東北地域大学教育推進連絡会議 (9 月 20 日)

平成 24 年度 IDE 大学セミナー (11 月 19 日)

大学教育学会課題研究集会 (11 月 22～23 日)

弘前大学 FD ワークショップ (12 月 7 日～8 日)

大学教育学会第 34 回大会（2012 年 5 月 26 日～27 日）

総合教育研究センター高等教育開発部門 渡部芳栄

1. テーマ：転換期の大学教育

2. 会場：北海道大学高等教育推進機構

3. 内容・スケジュール

（1 日目）

9：00～9：20 初めて参加する人のためのオリエンテーション

9：30～12：10 ラウンドテーブル

13：10～14：00 総会

14：10～14：20 開催校挨拶 北海道大学総長 佐伯 浩

14：20～15：20 基調講演 北海道大学名誉教授・ノーベル賞受賞者 鈴木 章

15：30～18：00 自由研究発表

18：00～20：00 懇親会

（2 日目）

9：00～12：10 自由研究発表

13：10～15：10 シンポジウム ・ 並行開催

15：10～15：20 次期開催校挨拶

15：30～16：50 緊急シンポジウム：大学の秋期入学をめぐって

16：50～17：00 閉会

4. 報告

本学からは森知高先生（人間発達文化学類）、横山雅夫先生（共生システム理工学類）、丸山和昭先生（総合教育研究センター高等教育開発部門）と渡部の参加があった。本大会については、2012 年 9 月 1 日発行の「共通教育アリーナ」（第 63 号）にて、各参加者より報告をしたところであるので、そちらに譲りたい（職員専用掲示板にて閲覧可能）。

大学教育改革地域フォーラム 2012 in 宮城教育大学 (2012年6月29日)

総合教育研究センター高等教育開発部門 丸山和昭

1. 会場：宮城教育大学（宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉149番地）

2. 内容・スケジュール

13:00~ 13:30~ 13:40~	受付開始 開会挨拶、主催大学挨拶 【フォーラム】 ・文部科学省制作映像「今、問われる「大学での学び」」 上映、パネリストからの発言、パネルディスカッション 【テーマ】 大学の学修の内容と時間を、 教員・学生・メディア等はどう考えているのか？ 学修時間を増加・確保し、 大学での学びを深めるために何をすべきか？
16:50~ 17:00	審議のまとめ 閉会
パネリスト	常盤 豊 文部科学省 大臣官房審議官（高等教育担当） 見上 一幸 宮城教育大学 大学長 島森 哲男 宮城教育大学 教授 鈴木 素雄 河北新報社 論説委員長 中川西 剛 宮城県高等学校長協会 会長 / 仙台第三高等学校 校長 宮城教育大学学生3名
モデレーター	菅野 仁 宮城教育大学 教授

4. 報告

宮城教育大学が文部科学省との共催により開催したフォーラムに参加した。このフォーラムは、中央教育審議会大学分科会大学教育部会の審議まとめ「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」を受け、大学における学士課程教育の質的転換を図るために必要な課題や具体的な取組等について、大学、教員、学生等の立場から幅広く議論することを目的としたものである。

特に印象に残ったのは、学修時間の「量」ではなく「質」を問う、学生参加者からの発言である。たとえば、「野性の知を磨くために、社会勉強やサークル活動、ボランティア活動も勉強ではないのか？」との意見である。他方、学生の勉強を促すためには、高校と同様の「勉強させる」体制が必要である（むしろ、そちらの方がありがたい）との発言も学生からなされた。現代における学生の多様性を踏まえると、学生に主体的に学ばせるための仕掛け、動機付けについても、一筋縄ではいかないのではないか、との感想をいただいたフォーラムであった。

Q-Links 第3回 OD プロジェクト (2012年8月29日～9月1日)

総合教育研究センター高等教育開発部門 丸山和昭

1. テーマ：さあ語り合おう！ - 価値ある会議づくりを探る -
2. 会場：国民宿舎 虹の松原ホテル（佐賀県唐津市東唐津3丁目）
3. 内容・スケジュール

一日目	
10：30～	オリエンテーション（ファシリテーター挨拶／コンセプト案内） チェックイン（チーム分け／ミラーリング）
11：20～	Dialogue 1 参加者同士で対話しよう（会議事例の共有）
11：50～	昼食
13：05～	Dialogue 2 実際の会議を“診て”対話しよう（模擬会議“フィッシュボウル”）
14：10～	休憩（おやつ）
14：30～	Dialogue 3 観点を持ちながら映画を“診て”対話しよう （映画『十二人の怒れる男』観賞／分析・共有）
16：45～	Reflection & Writing 空っぽになって考えて引き出して（描いて）みよう （ソロウォーク／ライティング）
17：40～	夕食
19：50～	Dialogue 4 空っぽなまま“Yes, and”で対話しよう（LABO Bar）
二日目	
9：30～	オリエンテーション（ファシリテーター挨拶／体操／成果紹介）
10：00～	Dialogue 5 今も心と頭に残っていることで対話しよう（学びの理解・共有）
10：30～	Dialogue 6 柔軟にアイデアを集めよう （マンガラアート「成果の上がる会議室」会議がまわる秘策）
12：15～	昼食
13：35～	Reflection & Writing アイデアを整理しよう（ライティング）
14：00～	Dialogue 7 心からやりたいと思えることに気づこう（インパシサークル）
15：00～	休憩
15：10～	チェックアウト（体験の振り返り／トキグオブジェクト／ファシリテーションラフィック）
15：50～	閉会式（まとめ／今後の展開／閉会の挨拶／修了書の授与／記念撮影）

4. 報告

昨年度に引き続き、Q-Links（九州地域大学教育改善FD・SDネットワーク）の合宿プロジェクトへの参加である。今回はOD（組織開発）ということで、大学における価値ある会議づくりがテーマであった。基本コンセプトは、何らかの答えを提供するのではなく、参加者に自由な対話の機会を提供し、自ら考えを進める手助けをすることにあるが、上記の日程表に付記した通り、考え抜かれた構成と、様々な仕掛け、工夫が凝らされている。教職員対象のプログラムではあるが、昨今話題のアクティブラーニングにも関連して、学生に自ら考えさせる仕掛け、工夫にも生かせるのではないかと、大変勉強になる二日間であった。

東北・北海道地区大学等高等・共通教育研究会(2012年8月31日～9月1日)

総合教育研究センター高等教育開発部門 渡部芳栄

1. テーマ：誰のための学士課程教育か？

学生・教職員・大学それぞれの自己実現の観点から

2. 会場：酪農学園大学

3. 内容・スケジュール

1日目

- 10:00～10:20 総会
- 10:20～12:00 全体会
- 13:30～17:00 分科会
- 18:00～20:00 情報交換会

2日目

- 9:30～12:00 全体会
- 12:00～12:30 総会
- 12:30～13:30 幹事大学会議

4. 報告

本学からは飯島充男教育担当副学長、村上雄一先生（行政政策学類）、熊本尚雄先生（経済経営学類）、古関英雄氏（教務課共通領域担当）、木村司氏（教務課教務企画担当）、岩崎聡子氏（教務課共通領域担当）と渡部の参加があった。本大会については、2012年12月3日発行の「共通教育アリーナ」（第64号）にて、各参加者より報告をしたところであるので、そちらに譲りたい（職員専用掲示板にて閲覧可能）。

東北地域大学教育推進連絡会議（2012年9月20日）

総合教育研究センター高等教育開発部門 渡部芳栄

1. 趣旨：東北地区国公立大学の教育支援担当教員等が一堂に会して、学士課程教育の構築に向けた教養教育カリキュラム・実施体制、また広く大学教育力向上のためのFD等のあり方に関する情報交換・交流を行う。

2. 会場：山形大学小白川キャンパス基盤教育2号館1階211教室

3. 内容・スケジュール

13:30～13:40 開会挨拶

13:40～15:40 第一部 基調講演

講演者：八田弘氏（文部科学省 高等教育局大学振興課大学改革推進室専門官）

テーマ：「学士課程教育を巡る近年の政策動向について」

講演者：金子元久氏（筑波大学大学研究センター教授）

テーマ：「主体的に考える力を育成する大学」

15:50～16:30 第二部 東北地区大学の取組状況報告

報告者：田中正弘氏（弘前大学 准教授）

報告者：倉田貢氏（東日本国際大学 教授）

報告者：小田隆治氏（山形大学 教授）

16:50～17:00 次年度開催校について

17:00 閉会

17:30～ 情報交換会

4. 報告

第一部では、文部科学省の八田氏と筑波大学の金子先生からお話があった。八田氏は、大学改革実行プランや、大学教育の現状、8月に出た2つの中教審答申などを説明されていた。その8月に出た中教審答申のうちの1つ「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」作成の立役者である金子先生は、同答申の中核をなす日本の大学生の学修時間の少なさを説明していた。中でも、学生を「高同調型」「独立型」「受容型」「疎外型」に累計し、学生がどのカテゴリーに分類するかによって学修時間の長さや自信（能力の自己評価）に違いがあることを示したグラフは興味深かった。

第二部では、3大学から事例報告があった。所要のため山形大学の事例を聴かずに帰福したが、弘前大学はティーチング・ポートフォリオ、東日本国際大学はFD活動3本柱（授業相互訪問・学生アンケート・研修会）を、強烈に進めている印象を持った。いずれも本学になじむ方法ではないと感じたが、東北地区の他大学の状況を知るいい機会であった。

平成 24 年度 IDE 大学セミナー（2012 年 11 月 19 日）

総合教育研究センター高等教育開発部門 丸山和昭

去る 11 月 19 日に、仙台ガーデンパレスにて開催された IDE 大学協会主催の大学セミナーに参加してまいりました。本年度のセミナーのテーマは「大学の教育改革と組織編制」ということで、東京大学名誉教授の天野郁夫氏、金沢大学の櫻井勝氏、立命館アジア太平洋大学の藤本武士氏、国際基督教大学の森本あんり氏からの講演が行われました。

まず、天野氏の講演「大学組織の歴史と課題 - 学部・学科 / 講座・学科目」は、日本の大学における教育研究組織が混乱と多様化の一途をたどっている、との課題意識のもと、日本の大学における教育研究組織の変遷を明治から現代にいたる歴史の中に跡付け、その原因と課題をさぐるという、非常に大きな視点からの講演内容でした。特に印象に残ったのは、混迷・混乱の最大の原因を、「ヨーロッパ・モデルからアメリカ・モデルへの中途半端な移行」とする指摘です。研究と教育の「統合」から「分離」へ、「研究中心」から「教育中心」へ、「教員中心」から「学生中心」へ、といった変化が内実ですが、昨今の混乱を省みるに、いずれのモデルに同一化するのでもなく、日本的組織構築を模索する必要があるのではないかとこの指摘は、改めて大学改革の方向性を考えさせる課題提起でした。

次に櫻井氏の講演「学部を超えて 8 学部から 3 学域・研究域へ」は、金沢大学における組織改革の事例を紹介する内容でした。具体的には、2008 年に行われた学部学科体制（8 学部 25 学科）から学域・研究域制（3 学域 15 学類）への移行について、その経緯、成果、課題の説明がありました。改革の結果、受験関連雑誌において「縮小（8 学部から 3 学部）」の印象を持たれてしまったこと、また大所帯化によって部局への帰属意識が希薄化した結果、中央人事がスムーズになる反面、ボトムアップの意見が弱体化したなど、改革の実態を知ることができ、大いに参考になりました。

藤本氏の講演「グローバル人材育成のための教育制度と組織」は、立命館アジア太平洋大学における教育組織・制度を紹介する内容でした。立命館アジア太平洋大学は、2000 年開学ということもあり、当初から国際通用性のある教育を目指した諸制度、具体的には日英二言語教育、GPA、科目ナンバリング、シラバス、春・秋入学、セメスター・クォーター制度が組み込まれた事例です。特に、FIRST（Freshman Intercultural Relations Study Trip）と名付けられた教育プログラム（少人数グループで現地の言葉で現地の人たちとコミュニケーションを取りながら目的地をめざし設定したテーマの調査を行う異文化オリエンテーリング）が印象に残りました。

森本氏の講演「1 学部制とメジャー制：ICU のリベラルアーツ改革」は、国際基督教大学における組織改革の事例を紹介する内容でした。具体的には、2008 年にリベラルアーツ教育の徹底を目的に行われた学科制の廃止について、その背景、ねらい、現状の説明がありました。同大学の改革は、教養学部を 6 学科に分け、それぞれ入学定員を割り振っていた旧来の制度から、全員を一つの学科に入学させ、2 年次終了までに専攻を決定する仕組みへと変える取組です。非常にドラスティックな改革に驚かされましたが、「高校までの得意分野と職業志望を基に専門を選択させる現行制度は、大学 4 年間の教育の意義を大学自らが否定している」との改革理念には、改めて専門決定時期の問題について考えさせられた次第です。また、同制度を支えるシステムとして、3 学期制、アドヴァイジング、GPA、コースナンバリングの諸制度が有機的に連関しているとの指摘は、これらの制度を福島大学において検討する際の参考となるとともに、これらのシステムを早期から実施してきた ICU の特殊性を考慮する必要があるとの感想を持ちました。

大学教育学会課題研究集会（2012年11月22日～23日）

総合教育研究センター高等教育開発部門 丸山和昭

去る11月23日から24日にかけて、島根大学にて開催された大学教育学会の課題研究集会に参加してまいりました。私は1日目に行われた基調講演「グローバル社会における大学教育の質保証」、開催校企画シンポジウム「中退問題から考える大学の質保証」と、2日目に行われたシンポジウム「FDの実践的課題解決のための重層的アプローチ」及び「学生支援に携わる教職員に求められる能力とは何か」に参加してまいりました。ここでは、これら3つのシンポジウムの内容について、ご紹介したいと思います。

まず1日目の企画シンポジウムでは、昨今取り沙汰されることの多い「大学の質保証」について、中退問題と関連付けた講演、議論が行われました。シンポジストは、関西国際大学の濱名篤氏、大学基準協会の鈴木典比古氏、日本中退予防研究所の山本繁氏、肥後功一氏でした。特に興味深かったのは、濱名氏による講演「大学中退のとらえ方～マクロな視点から～」です。日本の中退率はOECD諸国の中で最少ですが、これを教育が適切に機能している証拠とみるか、それとも進級や卒業における質保証が機能していない証拠とみるか、挑発的な投げかけがあり、活発な議論となりました。また、事例として米国の中退対策の紹介がありましたが、大学間移動を可能とする科目ナンバリングの地域内での統一は米国でも未解決の課題であること、また米国における学修成果の把握は他大学との比較というよりも自大学内での経年変化の把握に重きが置かれていることなど、中退問題に止まらない質保証施策の実情を知ることができ、大いに参考となりました。

次に2日目のシンポジウム「FDの実践的課題解決のための重層的アプローチ」は、本年度より開始される課題研究の第一回目の報告でした。同課題研究は、各大学に普及したFD活動について、改めて「学生の学習」に焦点を当て、見直しを図ろうとの趣旨に基づいており、愛媛大学の佐藤浩章氏、山田剛史氏、新潟大学の加藤かおり氏がシンポジストとして登壇しました。特に参考となったのは、佐藤氏によるFD活動を重層的に捉える枠組みです。これは、学生の「質の高い学習」をコアとして、その上にミクロレベルの「授業の改善」、ミドルレベルの「カリキュラムの改善」、マクロレベルの「全学的教育制度の改善」を、同心円状に重ねるモデルです。しばしばFDはミクロレベルの「授業の改善」にのみ注目が集まりますが、何のための授業改善なのか、また授業改善を取り巻く環境に問題はないのか、といった視点を欠いては実践上の意義を持ちえないと、改めて考えさせられたシンポジウムでした。

最後に、シンポジウム「学生支援に携わる教職員に求められる能力とは何か」は、昨年度に引き続き行われた課題研究の第二回目の報告で、学生支援の実践を支える教職員の能力開発に焦点を当てた内容でした。シンポジストとしては、国立教育政策研究所の川島啓二氏、立教大学の橋場論氏、及び日本学生相談学会からのゲストとして広島修道大学の大島啓利氏が登壇いたしました。このうち、川島氏からは日本における学生支援スタッフのための研修制度の概観、橋場氏からは米国における学生支援の専門職としてのスタッフ養成の仕組み、また大島氏からは学生相談学会が認定を予定している「学生支援士」の紹介が行われました。印象に残ったのは、大学職員の専門性と、学生支援職の専門性をどのように捉えるか、という点についてのフロアとの議論です。職務ごとに専任のスタッフが配置される米国の大学と異なり、日本の大学職員は多くの部署を回る中でキャリアを形成するため、学生支援の専門性開発の仕組みについても、米国とは異なる日本独自のシステムが必要なのではないか、との感想を持ちました。

弘前大学 FD ワークショップ (2012 年 12 月 7 日～8 日)

総合教育研究センター高等教育開発部門 丸山和昭

去る 12 月 8 日、弘前大学にて開催された FD ワークショップ「能動的学修(アクティブ・ラーニング)の推進に向けて」に参加してまいりました。8 月に中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」が出されて以来、学生の能動的学修(アクティブ・ラーニング)を促す教育活動の展開が、各大学において改革課題となっています。これら能動的学修のための方策としては、ディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換が考えられますが、中でも PBL: Problem Based Learning(問題解決型学習)と呼ばれる形態の授業に注目が集まっています。本ワークショップは、アクティブ・ラーニングの手法の一つとして PBL を紹介するとともに、参加者それぞれの授業実践の省察を踏まえ、アクティブ・ラーニング導入の方策を考えるべく、企画されたものとのことでした。ワークショップの内容としては、三重大学高等教育創造開発センターの中山留美子氏から「Active learner を育てる:PBL 教育の特徴と進め方」と題する講演があった他、弘前大学医学部の学生が参加しての PBL の模擬授業、及び参加者のアクティブ・ラーニングについての理解を深め、自分たちの授業を省察するためのグループ討議が行われました。

中山氏の講演は、PBL の有効性についての心理学的な解説、PBL の普及の経緯、三重大学での PBL 教育の導入経緯と実践内容など、非常に盛りだくさんの内容で、大いに勉強になりました。中山氏によると、PBL は 1960 年代にカナダの医学教育から開始されたもので、その後、1970 年代に工学系教育へ、さらに 1990 年代に他の専門分野へ拡大したのち、2000 年頃から日本の大学に導入されたとのことでした。三重大学の取組も、元々、医学部において行われていた実践が、平成 16 年度以降の概算要求を弾みとして、全学的な取り組みへと発展したとの説明で、医学教育の影響の大きさを感じた次第です。

弘前大学でも同様に、PBL は医学部において先進的に取り組まれており、模擬授業の内容も、実際に弘前大学の医学部で行われているプログラムに基づくものでした。同プログラムは、医学科 2 年生の前期に週 2 回実施されるもので、8 名程度で 1 クラスを構成し、前期 14 週で 7 クールをこなすとの内容でした。1 クールは 2 週間で、各回の授業では、特定疾患に関連するシナリオをもとに、「Fact の抽出」「Hypothesis を挙げる」「Learning Issue を挙げる」「Need to know を挙げる」の 4 ステップを、学生のグループワークによって進めていきます。各クラスにはチューター教員が 1 名つきますが、模擬授業では、ほとんど学生の自主性に任せ、要所要所での方向付けにのみ関わる様子が印象的でした。医学部の授業ということもあり、シナリオは癩癩患者の運転免許取得に関する問題など、疾患と社会生活にかかわる具体的な内容でしたが、シナリオの工夫次第で、他の専門分野や共通教育に導入可能であるとの感想を抱いた次第です。

最後に参加者のグループ討議では、講演と模擬授業を踏まえた上で、自分たちが考えるアクティブ・ラーニング像を整理するための KJ 法を用いたグループワークが行われた他、実際に自分たちが用いているシラバスを相互に点検し、何かアクティブ・ラーニングに通じる取組が含まれていないか、また学生の能動的学修を促すために改善を加えることができないうか、意見の交換が行われました。すでにゼミ等で行っている内容がアクティブ・ラーニングのモデルに近いことなどが再確認された他、アクティブ・ラーニングの導入が容易な科目と難しい科目があるとして、後者において、どのように学生の主体的な学修を促すのが、個別グループを越えた共通の関心として議論になりました。



4.FD・SD ジョイントセミナー

平成24年度FD・SD ジョイントセミナー報告

平成 24 年度 FD・SD ジョイントセミナー報告

総合教育研究センター高等教育開発部門 渡部芳栄

今年度開催のセミナーについて

総合教育研究センター高等教育開発部門では、例年 FD・SD ジョイントセミナーを開催しております。今年度も FD プロジェクト等と協力し、3 回の FD・SD ジョイントセミナーを開催しました。ただし、今年度は予算の都合上、部門独自に行ったセミナーは第 3 回セミナーのみで、第 1 回は東北大学と、第 2 回は愛媛大学との共催で行いました。

セミナー内容と参加者数

テーマは、第 1 回を「豪州における学士課程教育改革と質保証の取り組み」、第 2 回を「学生を元気にする学生支援」、第 3 回を「授業支援ツールとしての LiveCampus の利用法」としました。詳細は後掲のチラシをご覧ください。

なお、当日の参加者数の詳細は以下の通りです。

	本学教員	本学職員	他大学教員	他大学職員
第 1 回	6	17	3	0
第 2 回	3	10	1	16
第 3 回	4	7		

次年度への課題

上記の参加者数をご覧いただければお分かりかと思いますが、本学教員の参加者数が少ないことがわかります（本学教職員には、主催者である当部門・センターの教職員の数も含まれております）。この点については、周知の方法に問題がある、ニーズにマッチしていない、学内・学類内の他の業務・会議等と時間帯が重複している、などが原因として考えられます。については、職員専用掲示板への掲示、チラシの教員 box への配布など行っているところですが、個別に周知をするなどあるかもしれません。ただ、参加を「お願い」する性格のものにはしたくはないと感じています。

そこで に関係することになりますが、当部門が大学政策や全国動向等から大学全体に関連するようなセミナーを引き続き企画する一方で、学類や専攻のニーズにマッチしたセミナー等の企画を学類にて行うことも今後考えていく必要があるでしょう。この点は既に全学教育改革委員会にて議論されていることでもありますし、まえがき・あとがきにあるように、次年度以降は教育企画委員会と FD プロジェクトが統合し、新・教育企画委員会が発足することになっており、全学的視野と学類（学問分野）的視野の両方から FD の実質化が実現されることが望まれているところです。FD プロジェクトは廃止されますが、先生方には、自ら企画し、様々な FD 活動をしていた FD プロジェクト発足当初の報告書も読み返していただけると幸いです。

福島大学 国際FD・SDジョイントセミナー

豪州における学士課程教育改革と質保証の取り組み

—メルボルン大学における教育マネジメントの事例から—
Undergraduate education reform and quality assurance in Australia
— Case of educational management in the University of Melbourne



講師
Richard James
(Professor)



Sofie Arkoudis
(Associate Professor)

日時：2012年9月10日(月) 15:00～16:30
 会場：福島大学経済経営学類大会議室
<http://www.fukushima-u.ac.jp/guidance/campusmap/index.html>

主催：福島総合教育研究センター
 共催：東北大学高等教育開発推進センター、豪州首相日本対象教育支援プログラム

教職員能力開発拠点(愛媛大学教育企画室)事業

FD・SDセミナー in 東北

2012年11月3日(土)～6日(火)



本事業は、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室が、岩手大学大学教育総合センター、いわて高等教育コンソーシアム、福島大学総合教育研究センター、東北大学高等教育開発推進センターと連携して開催するFD・SDセミナーです。大学の教職員の皆さまへの能力開発支援が、東北地域全体の支援につながればという想いで本事業を企画させていただきました。内容も、教員、職員、学生の皆様幅広くご参加いただけるよう、各主催校のニーズを踏まえた上で、学生支援、教職員能力開発、授業改善など多様なものをご用意させていただきました。全国の皆さまはもちろんのこと、とりわけ東北地域の大学関係者の皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

<p>11月3日(土) 10:00～17:00 SDコーディネーター(SDC)養成講座 講師：秦 敬治、米澤慎二、阿部光伸 対象：高等教育機関の教職員・管理職 会場：岩手大学 学生センターA棟 G22教室 定員：50名</p>	<p>11月5日(月) 15:00～17:00 学生を元気にする学生支援 講師：秦 敬治、佐藤浩幸、山田剛史、奥谷道子、阿部光伸、米澤慎二、仲道雅輝 対象：高等教育機関の教職員 会場：福島大学 総合教育研究センター1階 特別教室 定員：50名</p>
<p>11月6日(火) 15:00～17:00 授業デザインワークショップ入門 講師：佐藤浩幸、山田剛史、大竹奈津子 対象：高等教育機関の教員 会場：岩手大学 学生センターB棟 多目的室 定員：40名</p>	<p>11月6日(火) 13:00～17:00 大学職員のための 業務改善・企画力養成講座 講師：秦 敬治、仲道雅輝、阿部光伸 対象：高等教育機関の職員 会場：東北大学 マルチメディア教育研究棟 M401 定員：50名</p>

※内容詳細ならびにお申込み方法はチラシの裏面をご覧ください。

【主催】 愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室
 岩手大学大学教育総合センター
 いわて高等教育コンソーシアム
 福島大学総合教育研究センター
 東北大学高等教育開発推進センター

【本件に関するお問い合わせ】
 愛媛大学教育学生支援部教育企画課
 TEL：089-927-9154
 FAX：089-927-8100
 Mail：kiiyoku@stu.ehime-u.ac.jp

平成24年度福島大学FD・SDジョイントセミナー

第3回FD・SDセミナー

受講申込受付中!

『授業支援ツールとしての LiveCampus の利用法』

日時：2月22日(金) 13:00~15:00(予定)

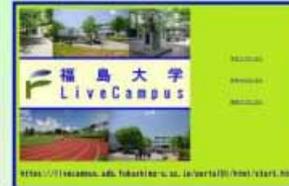
場所：総合教育研究センター棟2階「特別教室」

講師：株式会社NTTデータ九州 山下 康一氏

概要：

導入から1年が経過し、徐々に学内で利用が普及してきたLiveCampus。しかし、まだその機能の全てを理解しきれていない教職員も多いと思います。実はレポートやアンケートなど、実際に使ってみると便利な授業支援ツールが準備されています。

LiveCampusを開発したNTTデータ九州の山下様に、その機能の概要をご説明頂き、セミナーの中で実際に様々な機能を体験してみましょう!



福島大学総合教育研究センター
高等教育開発部門、FDプロジェクト
《申し込み & お問い合わせ先》
総合教育研究センター事務局 (内線2942)
E-mail: kyoiku-s@adb.fukushima-u.ac.jp

